これからの猪猟〈10回〉

田宮　治

続・会心の一撃

大峰筋までは六〇㍍くらいだが、真上に向かって登るのは崖があって無理なので、三頭が逃げた猪道に乗って斜面伝いに峰筋に立った。ちょうど狙いを付けていた第二ポイントの真竹の大藪と、篠竹の大藪が小峰できちっと区分けされた、猪の良い寝屋である。

私は大汗をタオルで拭いながら、山での犬引きの辛さを痛感していた。二頭の犬たちをたった六〇㍍引き上げるだけでも、これだけ苦労する。

人様は「猪犬たちを引き連れて山中を狩り回り、犬たちが猪臭に気付いて引き綱を目いっぱい引っ張り、犬たちが両足で立った時に放せばよい」とか、「猪犬芸のほとんどは、天性の猟能によって出来上がる。訓練などしなくても、庭先に鎖で繋ぎっぱなしの犬でも、山で放せば立派に猪を追う優れものもいる」と、それが当たり前のように言う。また、猪犬のケガを自慢気に話す猪猟人もいるが、私はそのような議論にとやかく言う気はない。猪犬の仕上がりなどは、しょせん猪猟人それぞれの世界である。猪猟を究めて登って行く過程で、その登った位置、つまり、その時点の実力が言わしめることなのである。

それでも、猪犬なのだから猪が獲れて、本人が満足できればそれでよいと思っているが、すべての点でそんな次元（実力）の猪犬では、今の私の身がもたない。

猪猟を楽しく、予定どおりに実践するための訓練は、何度も繰り返し発信している、綱で毎日欠かさず行う基本訓練にすべてがかかっている。車から放犬して、全く綱なしで思いのまま山中で猪猟をやり、楽しく安全に、予定どおりに犬たちとともに、止めた車に帰って来る。

このことは、猪猟で困る暴走犬対策であり、犬捜しが不要だということの証明である。さらには、猪止め犬に絶対に欠かせない主人との連絡の良さを証明しているのである。

これらの犬芸が、引き綱でコントロールされているように見事に出来上がっていることが、その後の猟果となって表れるのである。

猪猟の原理とは、あくまでも、ただこれだけの訓練（引き綱）で、実戦ではいつも犬たちが主人のそばにいて、その近くの猪を探し、猪の発見を生の鳴き声で主人に知らせてくれるので、激戦の場にすぐ駆け付けられるのである。したがって、強烈な噛み止め芸にもかかわらずケガもしないということになる。

体力のある若いうちは、何頭でも犬を引き連れて、猪を追って山中を飛び回れるだろう。しかし、全くの単独猟で、いくつになっても猪猟を思いのままに楽しみ、犬たちの極致の芸を実戦で検証しながら戦う相手（猪）には、必ず勝って、その成果をその先の「犬芸」や「戦術」に生かすことが大事なのである。

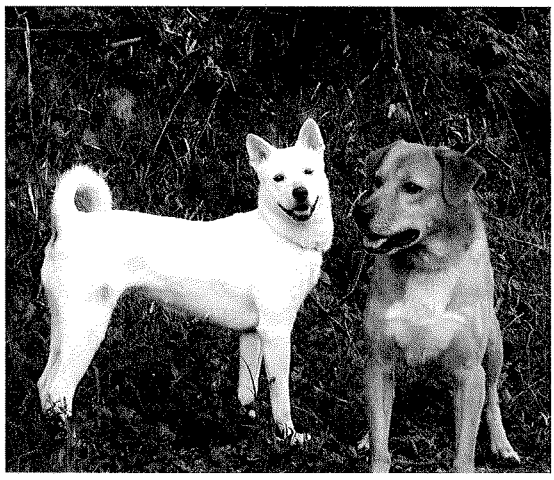
私がこの初戦で言っておきたいのがヨシ号、シロ号、マロ号の天下一品の戦う姿である。全力で戦った思いの丈をぶつけるように、撃ち獲った猪に噛み付いて放そうとしないヨシ号とシロ号に引き綱を付け、大峰筋までの急斜面を登ったのである。

ここで、引き綱を付けて登らな

ければならない理由は、犬たちの猟欲の強さ故に、猪に噛み付いて放さない時、引き綱を付けて犬たちを猪から引き放さなければならないからだ。

普段の努力や訓練で立派に出来上がる前述の犬芸と、猪猟人の特別な思いや、こだわり（執念）によって、実戦でのみ仕上がる極致の猪犬芸があると思うのである。

究極の猪犬芸は、まさにこの一戦の中に潜んでいるのである。どんなに頑張ったところで、決して訓練では仕上げられない極致の猪犬芸を、わが犬舎の犬群であるマロ号たちに己が力で感じ取り、成長してほしいのである。



マロ号とシロ号

猪犬は激戦で成長する

どれだけの激戦を勝ち取り、潜り抜けてきたことか。「さあ、早く行くぞ。マロは三頭を相手に頑張っているぞ！」と話しかけながら、すっかり成長したヨシ号とシロ号に引き綱を付けた。

疲れた体に鞭打って大峰筋の藪をかき分けて、マロ号が凄い鳴き声で猪発見の第一声を私に告げた大杉林の急坂の上までようやくやって来た。

真っすぐに急坂を下りて進めば、元に戻る感じで大峰筋が続いている。GPSで捜索すると、マロ号は右下にある、いつも車を止めている場所から三〇〇㍍くらい離れた今日三番目の猟場に予定していた孟宗竹の大藪の中で、激戦の真っただ中にあるようだ。

マロ号の鳴き声は聞こえないが、GPSの動きからすると、猪三頭を相手に私たちが来るのを待っているようだ。「さあ、行くぞ！」と、引き綱を付けたまま車を止めて狩り始める大杉林の小道まで来た。

ヨシ号とシロ号は遥か先の大竹藪にいるマロ号の戦闘に気付いて、鳴きながら強烈に綱を引っ張り、立ち上がっている。

「そら行け！　マロが待っているぞ」と二頭の綱を放す。ヨシ号とシロ号は大杉林の谷間を吹っ飛ぶように登り、姿を消した。「よしよし、これで安心だ。二頭目もいただき……」と、銃を握り締めてヨシ号たちの後を追った。

五〇㍍ほど走ったところで、ヨシ号とシロ号の鳴き声がマロ号の鳴き声に混じって、薄暗い静かな大杉林に響き渡った。

もう大丈夫だ。この三頭の実力なら六、七〇㌔の猪三頭くらいは何の問題もない。ただ、激戦現場が跳弾の恐れがある孟宗竹の大藪なので、うかつな寄り付きは許されない。

この大藪は十二月頃からタケノコを掘り始める猪たちの大事な採餌場で、周りの真竹藪には毎回のように猪が寝ている。今までは犬たちが周りの真竹藪で寝屋止めしてくれていたので、一〇〇㌔以上の大猪を何頭も撃ち獲っている猟場である。この大藪を突き抜けて逃げる猪は、まず撃ち獲れるものではない。

そんな何もかも知り尽くした猟場で、猪止め犬たちが猪三頭を止め、戦闘を繰り広げている。

共猟者が一緒にいれば、必ず「さあ、どうぞ。そっと寄り付いて撃ってください」と言い続けてきたが、今日の一戦はすべてを自

分の判断で、知り尽くした条件のもとで勝負に出るのである。

絶対の自信を持って猪三頭を撃ち獲る覚悟で、犬たちの鳴き声と猪の大音響のわき上がっている孟宗竹を目指してソロリソロリと寄り付いて行った。ところが、大杉林の中は下草と倒木などでなかなか前に進めない。その上、猪止め現場が高い山の斜面であるため、寄り付く私が丸見えになっている。

幸い、こちらが大杉林の中で薄暗く、所々に青木の株が立っているので、その株や杉の大木伝いに身を潜めながら目の前二五メートルくらいまで寄り付いた。

そこで目にした三対三の激しい戦闘現場は、想像を遥かに超えた恐ろしいまでのど迫力である。柵のない広大な訓練所に、犬三頭と猪三頭を放して闘いをさせているような光景である。

孟宗竹林の中を所狭しと、ワンワン、ギャンギャン、グォーグォー、ドッドッ、ドッドドッーと、黄色い竹の落ち葉を蹴散らし、掘り起こした土（タケノコの掘り跡）を飛び散らしながら、山の上に下への大騒ぎである。

「よし、ここで勝負してやる」と決めたが、孟宗竹のない場所に犬たちが猪を落として来た時以外に撃つチャンスはないと思った。

この場合、猪が飛ぶのに合わせて送り込んでの撃ち込みは厳禁である。犬と猪を見計らって、一点を狙い撃ちすべくチャンスを待ち続けていた。

犬たちは私のほうに猪を攻め寄せようとしているらしいが、猪も負けじと必死で攻撃している。鳴き声がどんどん竹林の上方に向かって行く。「しまった。私に気付いて峰を越えてしまうのか……」と愕然としていると、犬たちの凄い威嚇鳴きが一際高らかに響き渡った。

ウ、ウ、ウ、ワンワンワンの連続鳴きと、ギャッギャッギャッの噛み込みで、猪は地響きを立てて一気に落ちて来る。「よーし、来い」と、狙いを一点に集中していると、さすがはマロ号、ヨシ号、シロ号のトリオである。狙っていた孟宗竹の間に猪が飛び下りて来た。

真っすぐ上方二〇メートル、銃を送らず待ち受けて、向かって来る猪の鼻先を狙って静かに撃ち込んだ。凄い轟音が山々に谺したが、猪はそのまま竹林の中に姿を消した。

どうしたのかな？と思った次の瞬間、二頭の猪が同じ場所に追い落とされて来た。「何くそ！　負けてたまるか！」と、二発目を先頭の猪に撃ちかけたが、やっぱり駄目で、猪二頭は密生する竹林の中に姿を消した。

「しまった、私としたことが……」と、愕然としていると、シロ号とヨシ号が猪を追って来て私をちらっと見下ろしていたが、すぐ猪を追って竹林の中に消えた。

その時である。峰の上方から攻め込んだマロ号の一喝である。猪は孟宗竹の藪から抜け出し、また第一戦の戦闘現場を目指して走り去ろうとしている。悔しまぎれの一発を撃ち込むが、五、六〇メートルでの追い撃ちではどうしようもない。あら行っちゃった？　全くもってどうにもならない。それでも犬たちは逃してなるものかと、三頭がぴったり猪に付いて追って行った。

「こうなったらGPSを頼りに先回りして、必ずこの猪を獲ってやるぞ」と、犬たちに申し訳ない気持ちで疲れも忘れて小道に出た。ここから大杉林にある細い道に乗って、いつも狩り進む反対方向からの大追走となった。実に三時間にも及んだ。

山を越え小沢を渡って犬たちを追い続け、「もう駄目か……。一番止めづらい六、七〇キロ級の猪だし、絶好のチャンスをものにできなかったのだからなあ」と、がっかりしてGPSを見ると、何とまたしても犬たちが猪を止め切っている。

私はヨシ号たちの頑張りにわれを忘れて、一目散に猪止め現場に急行した。ようやく現場の大峰筋までたどり着いた。そこは先ほど親猪八〇キロを撃ち獲った場所である。犬たちはそのすぐ一〇〇メートルくらい下にいる。

ところが、何とも不可思議な止め鳴きである。いつもの力強い迫力ある連続鳴きではなく、静かに

思い出したように時々鳴く変な鳴き方である。

それでも今度こそは必ず撃ち獲らねばと、慎重に万全の対策をとって寄り付くと、小沢の堰堤の上で三頭そっくり揃って猪に噛み込んでいる。

「しめたぞ！　お前たち、でかしたなあ……」と、いつものように銃を突き出し、撃ち込もうと五メートル近くまで寄り付いた。すると、何と猪は噛み倒され、両手両足を上にして既に絶命しているではないか。

私はほっとして小沢の岸にどっかと座り、「よしよし、よくやった、よくやった」と褒めてやり、一頭一頭綱を付けて近くの木に繋ぎ、いつものようにジャム入りのコッペパンを半分ずつ与えた。全身を撫で回してケガの確認をしたが、これだけの激戦にもかかわらず、全犬が無傷である。

私は何となく犬たちに気後れしながら、コッペパン半分に水をがぶ飲みして、しばしの間、ただ一人でやり遂げた初猟気分を満喫していた。

もうヘトヘトに疲れ切っていた。ここからの猪の運び出しはまさに地獄だが、まずは猪を獲ることが先決であって、猪猟の楽しさも面白味も、猪が獲れて初めて味わえるものである。まして猪猟の技術や犬芸の成長もまた、今日のような極限の激戦に勝つことで、生まれ育ち、成長するのである。

実戦に勝る訓練はないのであって、実戦で勝つ体験を積み重ねることで、どんな至難の戦いでも乗り越えられるようになる。

どんなに天性の猟能があろうと、理論や訓練で出来上がる猟技術や犬芸には限界がある。その限界を打ち破って、本物の実力を持った名犬や名人に登り詰めるためには、今日のような激戦に必ず勝って、その感激を犬たちとともに十分に味わうことなのである。

つまり、そんな体験を何度でも積み上げる極限の挑戦こそが、これからの猪猟であり、日本一の猪猟までの道筋なのだ。

名犬だとか、名人であっても、その完成には何の理屈もいらない。そこにある実体はすべてこのような極限の戦いを糧にして、その結果の上に見事に咲くのであり、汗と涙の結晶なのである。

この年齢になるまで、日本一の頂点を目標に登り詰めてきたが、どこまで登ったところで、単独猪猟で必ずやらなければならない大事なことは、そのすべてを自分の力でやり抜く以外にないのだ。

私はミカンを食べて栄養ドリンクをグイ飲みして十分な体力を取り戻し、「さあ、お前たちそろそろ帰ろうか」と話しかけながら時計を見ると、まだ十二時を少し回ったばかりである。

本来なら車で待機しているブイ号とカツ号、ムサシ号に組み替えて、あと一戦くらいはたやすくできる時間だが、もう私にはその体力は残っていない。犬たちに引き綱を付けてこの急斜面を登り、少なくとも大杉林の中にある小道くらいまでは一緒に連れ帰らないことには、またこの猪の所に戻って来てしまう。

「さあ、帰るぞ」と、綱で犬たちに伝えながら、小道までたどり着いた。そこで全犬を放し、小道伝いに車まで戻ることにした。犬たちはまだ狩りたいらしく、山に入ろうとするが、「来い、来い」と呼び戻しながら、まだ日盛りの中で初猟を打ち上げた。

猪の引き出しは明日、平野氏にお願いして、早めに加茂城に行って、ゆっくり風呂にでも入りながら、この一戦を味わい直す気持ちなっていた。

実はその後に分かったことだが、マロ号たちが孟宗竹の大藪で攻め落として来た一頭目の猪に撃ちかけた一発が、見事に決まっていたのである。十二月二十三日、猟友と一緒にこの地を狩った時にそのことが判明した。

私が撃った一〇メートルくらい先の竹林の中に、その猪が倒れていたのである。当然、猪の体は半分が他の動物に食われており、残る下半身も腐れ切った哀れな姿であった。せっかくのものを残念。

あの時は、次に来た猪に撃ちかけたが逃げられたのだ。その猪を追う犬たちを追いかけるのに必死で、現場の確認をしなかったためだ。

（つづく）